いちかわ 自然観察
ガイドマップ 3
中部Ⅰ
市川～八幡～大和田

～地域のあらまし～

市川市の中心部を構成するこの地域は、市内で最も都市化が進んだ地域です。JR総武線から南側はかつては広大な水田が広がっていました。一見自然が乏しいようにも見えますが、市街地のクロマツや江戸川土手など気をつけて見ると多様な自然が息づいています。私たちの日常生活に最も密着した自然といえます。

市　川　市

市川自然観察ガイドマップについて

市川市では、市民の皆さんに身近な自然環境に目を向けていただき、そこに生息する動植物の姿や自然のしくみについて知っていただくため、市川市を6つの地域に分け、地域ごとに順次自然観察ガイドマップを発行しています。市川市の自然環境は決して豊かとは言えませんが、海、低地の市街地、川、谷津、斜面林、台地上の農地など、バラエティーに富んでいるのが特徴です。

自然観察ガイドマップは、地域の自然の見どころを紹介したマップとあわせて、市川市の自然を観察する上でのテーマを、各マップに10テーマずつ合計60テーマ紹介しています。どうぞ休日のお散歩のお供にしていただき、身近な自然をお楽しみ下さい。

市川市では市川の自然を紹介する下記の資料を発行しています。

- ●発見・市川の自然
- ●市川の自然・緑と水辺のまるごとガイド
- ●江戸川放水路・生きものまるごとガイド
- ●市川市巨樹・巨木林調査報告書

また、歴史や文学に関する出版物も発行しておりますので、詳細についてはお問い合わせ下さい。

市川自然観察ガイドマップ3
中部Ⅰ（市川～八幡～大和田）
平成18年3月（改訂）
発　行　市川市
編　集　市川市環境清掃部自然環境課
自然環境専門員 高野史郎
〒272-8501 市川市八幡1-1-1
Tel.047(334)1111（代）

定価50円（税込）　R100

大昔の市川と市川砂州

最後の氷河期だったヴェルム氷期の寒さも弱まり、暖かい時代が始まったのは1万年ぐらい前のことです。

日本列島の中央部分の植生も、針葉樹の林から広葉樹林へと徐々に変わってきました。国府台や北国分の遺跡からは、市川地区に人が住み始めたのは2万年ぐらい前と考えられています。

植物相も変われば、そこに住む動物も、人の暮らしも変わってきます。弓や猟犬を使ったイノシシやシカの狩りも始まりました。

5000年前頃、海が陸地の奥まで進み奥東京湾ができました。そして、3000年前には海退が始まり市川砂州が発達し、後背湿地としての真間の入江ができました。

川から運ばれた土砂が海流の力でうずたかく積まれるのが砂州。明治から大正にかけて、江戸川に橋がかけられ、この砂州の上を電車が通るようになりました。JR市川駅から本八幡駅へ向かう北側の道路で、土地の高低差に気づいてください。市川市の木、クロマツの分布とほとんど重なっています。

市川市が誕生したのが昭和9年（1934）、今の市役所が作られたのは昭和34年（1959）です。工事現場からたくさんのハマグリ、バカガイ、サルボウなどの貝類が発掘されています。

砂州の名残りを見つけてほしい平田付近の道路

真間川の川の名前もいろいろ

真間川は全長8.5km、西の江戸川と南の東京湾と、二つの出口を持つユニークな川です。

真間川水系としてまとめれば、春木川も国分川も、大柏川もその支流ということになります。治水と利水をめぐる時代背景の中で、川は流れも名前も変わってきましたが、この真間川の名も複雑です。

かつて真間川の名は、真間地区を西に抜ける部分を指し、八幡や中山に住む人にとって、国分川合流点から東の部分は境川、さらに下流へ行くと原木川の名もありました。

大町方面から流れこむ今の大柏川の下流は、江戸時代には内匠（たくみ）川と呼ばれていました。

内匠川は、鎌ヶ谷市道野辺から八幡、行徳を通って浦安に至る農業用水路で、湿地から水田への開発が盛んに行われた寛永年間（1624～1644年）に開削されたものです。

その後の耕地整理で改修され、水路は境川の上を懸樋（かけひ）で立体交差して渡されました。

それも昭和35年（1960）に冨貴島小学校の校庭部分が地下に埋められ、内匠堀の解説板だけが校庭に残されて、昔を語っています。

冨貴島小学校にある内匠堀跡の解説

葛飾八幡宮の千本イチョウ

地際から何本もの幹が合着したような形から、千本イチョウと呼ばれる国指定の天然記念物が、葛飾八幡宮にあります。どんな状態の苗を植えたのか、地際からたくさんのひこばえが同時に育ったのでしょうか。千本イチョウはその生いたちも謎に包まれています。

イチョウの巨樹としては、全国で7位の太さです。昭和56年（1981）の大風で地上7mのところから大枝が折れて、昭和6年（1931）の天然記念物指定当時よりも低くなってしまいました。

その昔、8月15日の祭礼の時には、数万の蛇が現れ、妙なる音楽が鳴り響いたとか、この巨樹にはフクロウが住みついていたなどという話もあります。

この木が誕生したのは、多分200～300年前の昔のことです。このあたりはまだ多くの野生生物が暮らし、複雑な食物連鎖が成り立つ生態系があった時代なのでしょう。

民家の屋根裏や畑には、フクロウなどの餌になるネズミが暮らしていたのかも知れません。

そんな時代の移り変わりを、このイチョウは見下ろしてきたわけです。

梢をわたる風の音にも、耳を傾けてみましょう。

千本イチョウの名前の由来になっている根もと

クロマツの茂る屋敷まち

市街地の中に残る貴重なみどり、クロマツは市川市の木です。地元の人ばかりでなく、JR総武線や京成線の車窓に広がる景観として市川市を特徴づけています。

このクロマツは、国府台あたりから鬼越の神明神社付近までの東西約4kmに分布し、縄文時代にできた市川砂州の位置と、ほとんど一致しています。

かつては、幹周3mを超える巨樹もありましたが、枯死したり、伐採されてなくなってしまいました。里見公園あたりのクロマツが枯れて見られなくなったのが残念です。今では地蔵山墓地あたりの幹周2.5mぐらいのものが最大で、樹齢は150年前後のものが多くなっています。

明治元年（1868）に出された玉蘭斉貞秀の“利根川東岸一覧”には、市川付近の風景が鳥瞰（ちょうかん）図で描かれています。天の橋立のように帯状に伸びた砂浜に、見事な松並木が見られます。

クロマツが多い理由にはいろいろな説があります。ナシ園の防風、屋敷の境界、門松用の生産、旧陸軍の建築用材など…。

古いマツの幹には、太平洋戦争中に松根油をとった時の傷あとが、今も残されています。

里見公園の石壁に飾られている昔の川の風景

八幡のやぶ知らず

市役所前、歩道拡張のために平成14年（2002）秋に北側が削られた八幡のやぶ知らずがあります。今はすっかりモウソウチクの林になって、周辺には小さな常緑樹も見られますが、林床の下草はほとんど見られません。

ずっと昔からこの道を通っていた方が、昔はどんな種類の木がどのくらいの高さで茂っていたか思い出して、語りついでいただきたいものです。

天慶の乱（939年）の時、平貞盛がここに陣を置き、将門を平定したといわれ、立ち入った者には必ずたたりがあると恐れられていました。

水戸黄門が戒めを破って入ったところ、白髭の老人が現れたという話もあります。陣の鬼門の一角にあたっていたのだとか、行徳の入会地だったので八幡の人が立ち入るのを禁止していたのだとか、伝えられている理由もいろいろです。

タケの仲間は、それぞれの幹の寿命は10年前後といわれています。何十年かごとに花が咲くと株全体が枯れてしまいますが、地下茎の最先端だけは生き残って若返ります。

今までここは、ほとんど人手を加えずに自然の遷移に任されてきたのです。これから先、どんな林に移り変わっていくのでしょうか。

歩道が広げられる前のやぶ知らずの森

水の流れにそって歩こう

市街地を流れる川は、中高年の人がなつかしむ昔の小川のイメージとはまるで違います。

江戸川は、上妙典にある江戸川放水路0kmの道標地点から、松戸市との境にあたる里見公園先の柳原水門までが約15kmあります。このうち、行徳可動堰で仕切られた下流の江戸川は海水で、いわば海の入江部分ともいえるところです。

川で暮らすサカナも、川岸の植物も、淡水と海水、それが混ざる汽水域とでは違ってきます。

真間川の水源は、山奥ではなくて、国分川や大柏川の流水に由来し、隣接する市の生活雑排水や大町からの湧き水です。

曲がりくねった路地に暗渠（あんきょ）のふたがあれば、そこは何十年か前の川の流れだったかもしれません。水の流れは、目には見えないほどゆるやかな所もありますが、台地から低地へ、そして海へと続いています。

冬になればユリカモメがやってきます。川の流れに沿って上流でも野鳥が見られるようになった理由は、市民の餌づけが関係しているのかもしれません。

小さなサカナも泳いでいく、そんな川の流れと、自然の生き物を眺めながら歩いてみましょう。

上妙典にある江戸川放水路0km地点の道標

堤防の植物、護岸の野草

土手の草を気にしながら歩いたこと、ありますか？　1年に何回も刈られているのに、裸地化しないでいつも緑色に茂っています。

踏み圧に強い草としてはオオバコがよく知られていますが、土手には外来種のヘラオオバコがふえています。この他にイネ科の細い葉の仲間やカラスノエンドウ、シロツメクサなどもあります。

地下茎や根に栄養を貯えるものを除けば、秋から春へ、あるいは、春に芽を出して秋には枯れるというのが、1年草と呼ばれるごくふつうの野草の暮らしです。

多年草のタイプにしても、光合成をする役の葉は始終切られているので、季節はずれに新しい葉をのばしたりと、苦労がたえません。

草刈りが繰り返される条件のもとでは、どんなタイプの草が生き残り、花を咲かせるのでしょうか。そのくり返しが今、土手の植生を作りあげているわけです。

都市河川も三面張りのコンクリートではなく、自然工法を期待する声が高まっています。あなたはどんな感じの草がどのくらいの高さに茂ってほしいと思いますか？

法面の吹付けも、外来種の牧草のタネではなく、昔からの日本産の植物が望ましいという意見が高まっています。

春の江戸川土手に咲く野草の花

街路樹とまちのみどり

夏の緑陰と冬の日だまり。常緑樹と落葉樹とどっちが好きですか？　花が咲く木では何が好きでしょうか？　まちなかを歩く時、街路樹観察も一つのテーマです。

市川市内の街路樹は、その下のツツジやアベリアなどの低木とあわせると20種類もあって、通りの区別にもなっています。街路樹の数は、高い木だけで12万本にもなります。

緑の葉は、水と二酸化炭素を原料にして光合成します。アスファルトの下の、踏み固められた地盤の中に根を伸ばして、水を吸いあげます。

大きな木は、1日に何リットルもの水を吸いあげ、増え続けるCO₂を吸収し、光合成をすすめます。

街路樹の根もと、植えマスの四角いスペースには、小さいなりの花を咲かせている野草が、四季の移り変わりも教えてくれます。

春はタンポポ、ナズナ、オオイヌノフグリなどです。それが夏から秋へどう移り変わっていくのでしょうか。タネが運ばれる手段は、風か、動物か、どちらでしょう？

図鑑片手に、そんな植物たちの暮らしも楽しみましょう。高い木、遠い木の花や葉を確かめるには、双眼鏡も便利な道具です。

クスノキが茂る東大和田の道路

巨樹に会いにいこう

市川に200本もの巨樹があること、知っていましたか？

平成13年（2001）までの何回もの調査で、胸高幹周3m以上のイチョウ、ケヤキ、スダジイなどの巨樹が175本あることがわかっています。あまり太くはならない樹種のソメイヨシノなども含めると197本ありました。

生えている場所としては、神社・寺院・学校の順ですが、個人の庭にも巨樹が見られるのが市川の特徴といえるでしょう。

分布としては、市川北部と行徳のお寺に多いのですが、道路のアスファルト化、住宅の近接など、長い歴史をきざむ巨樹にとっての環境は、次第に快適とはいえない傾向が強まっています。

樹木の北側の家では日陰になる、落葉で庭が汚される、屋根の樋がつまるなど、周辺の苦情も多いのです。

何世代も巨樹を大切に見守ってきた持主、日陰や落葉などマイナス面も受ける周辺の人々、すばらしい風景として喜ぶ遠くの人、そんな多様な人々の前向きの合意形成を期待したいものです。

平成14年（2002）10月、巨樹や市の木クロマツの保護育成のため、保存樹木制度による第1号として、新田1丁目のクスノキが指定されました。

保存樹木第1号に指定された新田のクスノキ

都市鳥といわれるカラスとドバト

バードウォッチングが人気なのは、野鳥は姿がきれいだから、鳴き声がいいから、そして環境にふさわしい野鳥の種類が見えかくれする、めぐりあいの楽しさにあるのでしょうか。

カワセミのように、誰にでも大歓迎される野鳥がいる反面で、都市鳥として嫌われているものの筆頭は、カラスとドバトのようです。

ゴミ置場を荒らしてちらかすハシブトガラスの英名は、Jungle Crow。ハシボソガラスが明るい草原を好むのに対して、ハシブトガラスは密林のような森が好きでした。それが今、ゴミ問題とからんですっかり市街地に住みつき、増えすぎたカラスが問題になっています。

カラスの巣作りは3月頃です。4月に産卵し、メスが温め、オスが餌運びと見張りを担当します。子育ては他の鳥よりずっと熱心で、夫婦仲もいいといわれています。

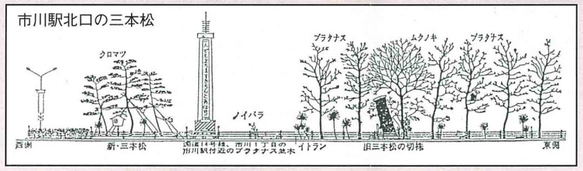
子ガラスが巣立つ頃の6月～7月、人との距離が近づきすぎると、トラブルをおこすことになるようです。

ドバトなどの都市鳥が増えすぎるのは無責任な餌づけも問題です。近所迷惑、そして自然のバランスをくずしてしまいます。

カラス被害についてのお寺のお願い

いちかわ 自然観察ガイドマップ 3

中部Ⅰ　市川～八幡～大和田



① JR市川駅北口。駅前広場を出ると、すぐ北側を千葉街道が走り、クロマツが茂るまちが広がる。

② いまはイヌシデやプラタナスに変った三本松跡の小さな記念碑。かつてグリーンベルトに名物の三本松があったが、昭和33年には切られてしまった。

⑩⑪ 真間3丁目から真間川へ向う道の桜土手公園。万葉集や市川ゆかりの文学者を紹介した文学の道でもある。

⑫ 総武線の車窓から見えるクロマツのまちを、東に向って歩いてみよう。いくつかの神社が並んでいる。住宅地の細い道沿いにもマツが茂っている。

⑬ 諏訪神社の裏手から菅野駅に抜ける平田緑地。かつてのお屋敷の名残り。

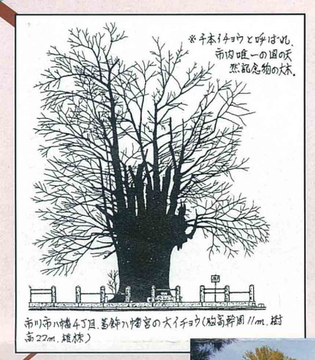
⑭ ビルの屋上から見下ろす千葉街道と胡録神社周辺のクロマツ。

⑮ 市街化が進む市川で、クロマツの景観も時代とともに変っていくか。

市川砂州のクロマツ

⑯ クロマツに囲まれた諏訪神社。

⑰ 北方橋のサクラ満開。このあたりにも見事なクロマツがそびえている。



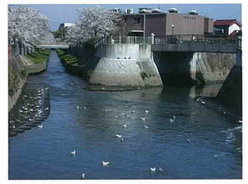
⑱ 葛飾八幡宮の千本イチョウ。雄株なのでギンナンはならない。

真間川の風景

Ⓕ 真間川8.5kmの西の出口は江戸川

Ⓖ 護岸の野草にも四季の変化が見られる

Ⓗ 真間川にはコイなどの魚も泳ぐ



Ⓘ 大柏川との合流地点、冬にはユリカモメが

Ⓙ 東消防署の屋上から見る桜の季節

船から見た江戸川

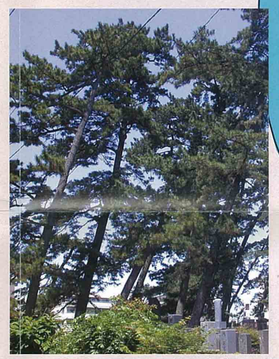
Ⓐ 川岸のヤナギも大水の時には水没する矢切の渡し付近

Ⓑ 流山・松戸方面からの坂川が江戸川に出る柳原水門

Ⓒ 松戸から国府台へ続く斜面林が川に近づく里見公園付近

Ⓓ 旧江戸川との分岐点にある水門と江戸川河川事務所の鉄塔

Ⓔ 行徳可動堰の西側には船の通行のための水閘門がある



③ クロマツに囲まれた地蔵山墓地。海からの風を受けて、北に傾いている。

④ 春日神社の松。市川砂州にそってクロマツが茂る。砂が飛ばされ、根上がり状態に。

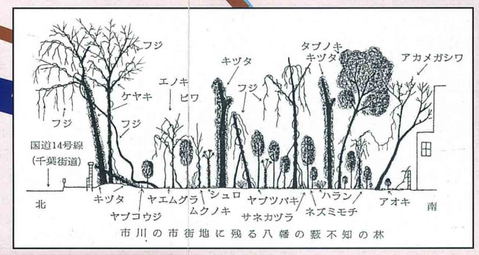
⑤ 江戸川のスーパー堤防に建てられたマンションのビオトープ。

⑥ 江戸川土手の野草。年に何回かの草刈りに耐えて、生き残る草の種類は?

⑦ 土手下のサクラ並木は、市民の散歩道。

⑧ 川辺のビオトープ。小さな凸凹が水溜りをつくり、多様な草が茂る。昆虫もやってくる。

⑨ 切り株とバス停の名前だけが残った一本松。京葉道路のシェルターの向こう側には、大和田の守り神、甲大神社がある。



⑲ 京成の線路沿いにある改耕碑。明治45年（1912）に耕地整理組合が発足し、多くの水路が作られ、五畝割を基本とした水田の区画化が行われた。

㉒ 秋の高石神社に落ちていたケヤキの果実。先端の小枝ごと落ちて、風で運ばれる。

★植生断面図3点は、石井信義氏が1980年頃に描かれたもの。環境の変化に伴う現況との比較を現地で確かめていただきたい。
★道路は主なものだけを示してある。縮尺はほぼ 1：17000。およその目安は6cmが1km。

0　1km

★マップデザイン：近藤　恵

⑳㉑ 市役所前の八幡やぶしらずの森とその解説。かつてはつる植物が樹冠を覆い、下草も多かったが、モウソウチクが目立つようになった。

㉓ 晩秋の高石神社。台地との境界にあり、15段ほどの階段が市川砂州のつながりであることを知らされる。